



濟州大学校海洋科学研究所 国際シンポジウム

「Technology and Value of Brand」／「ブランドの技術と価値」 東アジアの動向—学術1

2014年5月29日～31日 濟州市／海洋科学研究所

今年の韓国は、麗水海洋博覧会をはじめ、嬉しくも悲しくも「海」に関する出来事が多かった年である。ここでは、「海」に関わる国際シンポジウムを一つ紹介したい。濟州大学校海洋科学研究所主催で行なわれた International Meeting on Say about「Technology and Value of Brand」(五月二十九日～三十一日)である。「ブランドの技術と価値」をテーマとするこの国際シンポジウムは、海洋科学研究所所長・李榮敦教授の「ブランド育成」事業に繋がる日韓の学術協議である。

その趣旨は、人文社会諸科学の展開と科学技術との関連を総合的に検討することを通じて、文理統合研究の有効性を具体的に示し、また、その有効な方法を開発することを目的としている。今日に至る日本と韓国の学術システムとその基礎概念の形成過程について、輸入先の西欧文化との価値体系の差異、それを受けとる際に働いた漢字文化圏における伝統、受け入れ時期や再編の歴史的条件などを勘案し、新概念の創始、流布、定着、再編を総合して考察する。東アジア諸国に輸出された学術編制と日本の近現代の独自の知的システムの役割の解明を行うことを基礎にすえて「海」というテーマで現在、東アジアにおける「領土・資源・環境」等々の問題に新しい見地を示し、その解決

策を導き出す姿勢をもつことであった。多少、難解な文脈である。というのは、この学術シンポジウムの始まりは、大学共同利用機関法人の総合研究大学院大学(略称／総研大)・学融合推進センター研究助成プロジェクトの一つである「日本における諸科学の編制と基礎概念の検討、文理統合研究の有効性を探る」(鈴木貞美代表)から、濟州大学校海洋科学研究所の「ブランド育成」プロジェクトとの融合で展開した日韓初の「学融合」をめぐる国際シンポジウムであった。

総研大・学融合のプロジェクトは、「エネルギー」「生命」「情報」「科学政策」の四つの課題をあげていた。中でも「エネルギー」版は、金子務・大阪府立大学名誉教授のリーダーで二〇一〇年度より、地球環境問題が問われる時代人類の生活にとってエネルギーとは何か、という根本的な課題に取り組んできたが、二〇一一年東北大地震による福島原発事故によって「日本におけるエネルギー政策、産官学の体制、科学技術の在り方への疑問を投げかけざるを得なかった。その疑問と反省の声を集めた論集が『エネルギーを考える—学融合と拡散』(金子務・鈴木貞美編、作品社、二〇一四)として世に出された。そして、この論集は直ちに『에너지를 생각하다』(民俗苑、二〇一四)韓国版で

刊行され、本シンポの会場で共有された。

シンポに参加した発表者と論題は次の通りである。HYUN Jae-Ho(株)テクノベーションパートナーズ(CEO)「ブランドの価値創出の戦略」、稲賀繁美(国際日本文化研究センター)「交易の海賊史観にむけて」、金子務(大阪府立大学名誉教授)「近世日本における科学者像の原型」、鈴木貞美(国際日本文化

研究センター名誉教授)「エネルギー概念をめぐる研究からわかってきたこと」、朴美貞(国際日本文化研究センター)「朝鮮半島沿岸における海の産物をめぐるブランディング」、森洋久(国際日本文化研究センター)「エネルギーと情報」、金炫榮(国史編纂委員会)「通信使と東アジアの文化交流」、李榮敦(済州大学校教授・海洋科学研究所所長 www.leyoungdon.com)「済州道の溶

所長を務めている李榮敦教授(理学博士)は、ヒラメ養殖を成功させ、済州で養殖産業の発展的未來を拓いたバイオニアである。一般的に済州を代表する特産品としては黒豚、ミカンと鯛などが挙げられる。しかし、人々が多く接しながらあまり知られていなかった特産品が済州の養殖ヒラメである。李榮敦教授は、済州養殖ヒラメの研究者として合理的な養殖ヒラメの活路を模索し、自主的なブランディング作業を推進させている。それだけではなく、「社会に貢献する科学者」としての使命感を持ち、済州の漁民が豊かで多様な経済活動の基盤を持つために、さらに多様な魚種の養殖に挑戦している。研究への熱い情熱と経営感覚、世界的な活動力量で済州大学校海洋科学研究所と地域経済の発展を導いている存在である。

李榮敦教授の希望(考え)は、「ヨーロッパ水準の魚類養殖システムと養殖文化を構築すること」である。最近、李教授は産業通商資源部地域縁故事業に心血を注いでいる。済州養殖魚類のブランディングが主な骨子である同事業は、済州ヒラメを中心に畚바리(クパ) Golden Seedとクエ(済州名/アラ)、トラフグなど済州養殖魚類の国際輸出の可能性を模索することが目標で

岩海水と養殖の融合の価値創出」であった。本シンポでは、日韓学融合の最初の議論の場であったが、これから東アジアの中の共通の課題に取り組んで、その協議の場を広める必要性を関係者は痛感した。さらに、済州道の自然環境や海の幸、資源、未来模範都市としてのエネルギー政策(Smart Grid/次世代知能系電力網)、風力発電機や電気自動車、太陽光パネル等々の済州の魅力にたっぷり浸かれ、有意義な時間を持った。

本シンポを主催した済州大学校の「海洋科学研究所」は、①海洋の特性と資源の合理的な利用、②自然環境保全と保護、③海洋と環境分野における優秀な人材育成、④産学協同研究を通じて地域社会の発展に寄与することを目的に設立された。一九六八年に済州大学校に南方水産生物研究所が設立され、



「海洋科学研究所」本館



『에너지를 생각한다』(민속원, 2014)

『エネルギーを考える—学の融合と拡散』

「Technology and Value of Brand」／「ブランドの技術と価値」
東アジアの動向—学術1

ある。その間、済州の養殖魚類が日本や米国市場に相当数進出しているが唯一、販売基準が厳格なヨーロッパ市場では顕著な成果を上げることが出来なかった。

李榮敦教授は、ヨーロッパ市場に関する展望を次のように述べた。「ヨーロッパは特別に養殖魚類の販売認証を流通業組合が担当しています。商品販売するにあたって守らなければなら

ない厳格な組合内部規定のおかげで、ヨーロッパの食材料流通市場は、世界最高水準の安全と信頼性を維持しています。したがって、ヨーロッパで養殖魚類販売許可を受けるならば、これは事実上、すべての国家で認められるほどの公信力を持つことになります」と。ヨーロッパ農水産物流通組合が提示する「Global agricultural aquaculture practices(Global GAP)」は、「生産から流通と販売まですべての状況と手続きの基準を定めている。行政当局の管理法規よりさらに厳しく適用される組合規定のおかげで、その間、EUの農水産物市場の壁は海外の業者には難攻不落であった。

「ヨーロッパ農水産物流通組合は、養

殖魚類と家畜を含んだすべての食材料を△元気で安らかに△育てることを強制しています。併せて、業者に対しては勤労者の福祉と養魚場周辺の環境保全などを、幅広い思考と社会的経営を追求するように誘導していますね。私たちの養殖産業も高い水準に到達しましたが、色々な部分で、まだヨーロッパ型先進養殖システムと養殖文化には至っていません」と李榮敦教授は言う。

その間、済州養殖ヒラメの品質と価値を高めることによって、養殖漁民に活力を吹き込むために孤軍奮闘してきた李榮敦教授のこの成果は、韓国内最初のヨーロッパ認証の獲得という点で価値が大きい。今後、済州養殖ヒラメは、韓国の地方自治体と水産業協同組合、漁民にとって立派なロールモデルになるだろう。

「毎年、ベルギーで開催されるヨーロッパ水産食品博覧会(European Seafood Exposition)は、ヨーロッパの水産食品は勿論、世界の様々な国の水産製品が毎年参加する国際行事ですが、去る四日から十日まで七日間開かれた今回の博覧会で、済州養殖ヒラメを世界の人々に知らせることに注力し

ました。今後、多様な水産食品が済州養殖ヒラメの後に続いてヨーロッパ市場に進出するように支援します」。併せて李榮敦教授は、海外で認められる養殖ヒラメが故郷で冷や飯を免れない現実に遺憾の念を表した。つまり、済州道民は常に天恵の環境の中で豊富な水産食品に接するため、養殖ヒラメに大きい魅力を感じずにいるという。これと関連して、海洋水産部は「10大戦略品目」の中にヒラメを選定、生産性を高めて韓国人と世界の人々に普及させるように支援している、と。

そして、「現在の海洋水産部は、生産性増進を目標にヒラメの輸出商品化を積極的に支援しています。国内ではさしみの材料として主に使用されるヒラメを、西欧人の食欲に合わせてステーキ用で開発するなど多様な試みがなされています。ただし、ステーキに適合したヒラメは体重が2〜3kgまで到達しなければなりません。しかし、産卵周期が大きい障害要素になりました。養殖ヒラメが一歳を越えた春季に成熟期と産卵期を迎えるが、産卵を終えれば魚類の体力と免疫力が急激に低くなつて死亡率も高まって肉質も低下します。これを克服するために多くの研究を繰り返しましたよ」。

ほとんどの魚類の繁殖は、水温と光周期(昼の長さや夜の長さの比率)の影響を受ける特性があるために、季節別

で急激な日照量と水温変化が魚の成熟に多大な影響を及ぼす。これに対し李榮敦教授は「光」に着目、光周期を調節して養殖魚類が季節を勘違いするようにさせる研究を進行中である。生殖素の成熟状態(一般養殖魚が「卵をはらむこと」を持たなかった状態で個体の成長を持続的に誘導するためには、光量を調節して繁殖生理を自然に適應するようにすることが最も自然で、人工的でない最善の方法として選ばれる。

「春産卵期以後、生殖素が休息に入つた状態を持続的に維持することが力ギでした。ヒラメの性的成熟が起きない状態で生体リズムを生殖素休みの間に合わせることでです。現在、絶えず研究と補充を繰り返していて、一部は成功裏に市場に進出して販売高を上げています」。

李榮敦教授は先頃、成功的な結果をおさめた養殖ヒラメの例を基に、済州バリー課魚類プクパリ、アラ(標準名/クエ)、子문쟁이(標準名/マハタ)、ホンバリーに対する研究速度に拍車をかけている。

事実、国内に棲息するバリー課魚類の繁殖特性探索と宗廟生産技術開発は、国家次元で持続的に投資されてきたが、繁殖生理特性および性成熟制御技術不十分、親魚確保などの問題によって養殖産業化は難しい実情にある。すでにバリー課魚類の人工受精卵



済州バリー課魚類プクパリ

の生産と宗廟生産を国内で最初に成功させたとあって、現在は母個体を確保して繁殖特性に利用する技術と情報を基に産学研が養殖産業化に努めている。顕著な成果を上げている李榮敦教授は、海洋科学研究所の研究成果を活用して企業らが実用化する日を指折り数えている。彼は、単純なリーダーでない、養殖バリー課の商品化を目標にしている養殖産業の先駆者である。政府では、農水産物の種子強国を実現するために、二〇一三年から二〇二一年ま

海外マーケティング事業を推進していきます。近い将来、ヒラメに続きプクパリ、アラをさらに安い価格で消費者の食卓に上げられるように努力します」と。李榮敦教授は、済州の水を商品化する事業も併せて進行中である。火山島である済州島の地下には漢拏山の脈に繋がっている淡地下水と島が形成されて地下に形成された塩地下水が共存しているが、李榮敦教授は、まさに塩地下水の商品化の可能性に重きを置いている。

「済州塩地下水の水温は17〜18度を維持していて玄武岩と砂に濾過された水なので〈恒常性〉と〈清浄性〉を兼ね備えています。このような長所を備えた塩地下水は暖流性魚種と寒流性魚種を同時に養殖するのに大変良い環境です。人にすれば春・秋の気候と似ていることと同じです。今後、済州塩地下水は気候変化に対応、水産資源を保護し、開発していく重要な垣根になるでしょう」と。李榮敦教授は、済州塩地下水を〈溶岩海水〉と命名、ブランド化に力を注いでいる。〈溶岩海水〉は魚種養殖にも大きい効果を上げているが、自らの商品性も侮れない。塩分を除去して食用水に再誕生させて中国や東南アジア飲み水市場への進入を提示し、さらに化粧品素材、食素材、水耕栽培など活用範囲は無尽蔵である。李榮敦教授は一

〇年先を見つめて大きい枠組みで〈溶岩海水〉の商品化戦略を構想中である。済州大学海洋科学研究所は、一九六八年スタートから地理的条件上、海洋研究の特性を持った研究機関である。

「一九八六年、済州出身の在日企業家・奇堂康龜範翁より敷地五〇〇〇坪と建物、研究飼育洞と装備などを寄贈されました。それから活発な研究を願って運用基金の支援も受けました。私どもの海洋科学研究所は、康龜範翁の意により社会に貢献する研究に邁進してきています。現在の海洋科学研究所は、国際交流活性化のために緊密なネットワークを構築し、長崎大学と毎年、シンポジウムを開催しています。今年で11回目を迎えた交流行事は、養殖生物の繁殖生理研究事例を蓄積してきました。5回目からは中国の科学者も参加してそれなりの規模と成果を備えたシンポジウムです。併せて学生実習と地域漁民の所得創出方案を摸索するなど、研究機関であり教育施設としての役割を遂行しています」と。また、済州大学海洋科学研究所は、毎年、地域青少年に所定の奨学金を支援して社会的責務をも履行している。

自身の研究成果よりも、共同研究者らと共に成果を分けて実用化されることを望むという李榮敦教授。研究技術

を企業体に提供し、社会的に大きい効果を上げること、学者であり教授としての自負心とやりがいを感じる李榮敦教授は、今後の養殖産業発展の可能性に大きな期待を寄せている。韓国の水産養殖を世界的水準にまで開発して、これを商品化し、社会の助けになろうと実質的な研究を繰り返してきた。また今後、彼の情熱が水産養殖業を含んだ韓国国内経済発展にもより大きく寄与して、持続的な価値創出を謳歌するだろう。

済州は、石・風・女の多い島である意味を込めた三多(島)でよく知られているが、最近、中国人観光客が多いことを入れて「四多」とも呼ばれている。海軍基地をめぐる摩擦、中国人の不動産投機と中国人観光客による風紀の乱れ、賭博事業の動き等々の問題で住民は悩んでいるらしい。同時に、済州は自然・環境・水産等々の資源をどのように保存・育成すべきか、国際的視点で捉えるべき課題が残されている。もともと、済州道に期待を寄せる観点からは、その地政学的位置からして、将来的には国際的研究・地球的課題のコンソシアムが生き続けるエリアとして育成すべきであると考ええる。

朴美貞(国際日本文化研究センター
研究員・京都大学非常勤)編



2 ■ 民団大阪府泉州支部

「分かち合う」というのは…

「手を伸ばせば届くほどに近い国、日本と韓国。より良い日韓関係を築く事を願いながら、両国が共に作り上げていく交流会」

第2回「韓日文化交流会 in SENSYU」 ～「飛翔」「和み」「絆」～

4 ■ 特別寄稿 <朴美貞>

済州大学校海洋科学研究所 国際シンポジウム
「Technology and Value of Brand／ブランドの技術と価値」
東アジアの動向—学術1

8 ■ 京都日韓親善協会／(公財)京都青年会議所、韓国京都青年会議所 京都日韓学生모임(モイム)2014

10 ■ 「第8回世界韓人の日」記念／政府褒章伝授式 金昌植・民団中央本部常任顧問に国民勲章「無窮花章」

12 ■ 韓国民団近畿地方協議会 2014民団近畿合同ブライダルパーティー 12組のカップルが誕生

14 ■ 特別寄稿 <笠松性典>

莞島郡・申宇徹郡守が比叡山清海鎮大使張保皋碑を正式参拝

17 ■ 民団大阪府泉北支部／平和統一聯合近畿連合会 光明池韓国労働者慰霊祭

18 ■ [連載]歴史の接点をたずねて(64) <仕田原猛> 竹島(独島)を考える(7)

24 ■ 民団京都府本部、京都韓国教育院、NPO法人民団京都国際 交流センター、韓国京都青年会議所 第15回韓国語말하기(マルハギ)大会

26 ■ 伊藤三春・国際芸術院総裁 全国「一宮」詣で、正式参拝で絵画奉納 長門一之宮／住吉神社(山口)

28 ■ 学校法人金剛学園 第7回金剛学園オープンテコンドー選手権大会

30 ■ 大阪韓国文化院「Korea Month 2014友情と希望」 K-CINEMA WEEK 2014 in OSAKA

32 ■ MOVIE／アジア映画社 初公開「北朝鮮・素顔の人々」 同時上映／崩壊は現実か幻想か「金日成のパレード」～ 東欧の見た「赤い王朝」～

38 ■ 韓国の社説

40 ■ 民団中央本部 西日本地域議決・監察機関研修会

41 ■ 民団大阪本部 団員サービス業務を拡充 「みんだん生活相談センター大阪」開設式

42 ■ 大阪韓国商工会議所 企業訪問／(株)エクセディ本社 清水春生社長が講演「強い中堅企業を作る4つの条件」

43 ■ アポロサービスグループ

白頭学院伝統芸術部優秀生徒10名に奨学金
「奨学事業に対する意向書」に調印

44 ■ 民団大阪府中央支部

歴史講座／姜信英氏が講演
「誠信の交わりこそが日韓親善の扉」

45 ■ 民団京都本部

本部・支部議決・監察機関合同研修会

46 ■ 寄稿 <椎愛英>

大統領ひとりぼっち ◆クネさんのつぶやき(3)◆

48 ■ たえ子劇場(142) <まつだたえこ>

品格を書く(欠く?)

49 ■ 在日の詩(154) <曹奎通>

「満足感腹に満たせて」

50 ■ 特別寄稿 <姜健榮>

韓国のキリスト教伝道史(1) ～プロテスタント教会～

53 ■ MOVIE／アジア映画社

ドキュメンタリー映画
「ふたつの祖国、ひとつの愛」～イ・ジュンソプの妻～

54 ■ ウリ伝統文化協会／韓国茶道協会京都支部

「韓紙工芸・ボザギ展示会」「菊茶と韓紙工芸」「明倫茶会」
韓国の茶文化と韓国芸能を楽しむ会

56 ■ 特別寄稿 <尹禪弘>

日韓合同慰霊祭で三界萬霊供養と世界平和祈願を厳修

58 ■ 第10回復活！唐人揃い—「朝鮮通信使」—

川越から世界へ「信(よしみ)」を通わす
「多文化共生・国際交流パレード」川越唐人揃い

60 ■ 白頭学院伝統芸術部

全国高等学校総合文化祭10年連続出場記念
第3回定期公演「夢舞」

61 ■ 民団京都府左京支部

桂ちょうばさん迎え初の「落語会」

62 ■ NPO法人トッカビ／民団大阪府八尾支部

第24回八尾国際交流野遊祭

63 ■ 新・シニョンの朝鮮通信使現代紀行

生涯学習の先駆者／雨森芳洲

64 ■ KT美術館／CINEMA

「パパロッティ」